

I P U H S

vol.006
2019/02

茨城県立医療大学
IBARAKI PREFECTURAL UNIVERSITY OF HEALTH SCIENCES

通信

茨城県立医療大学
広報紙

特集 国際交流の現場から

台湾・高雄医学大学との連携協定締結

茨城県立医療大学卒業生インタビュー

第11期卒業生 大澤 侑一さん

茨城県立医療大学大学院生インタビュー

大学院博士前期課程 木口 尚人さん

■付属病院を紹介します

■茨城県立医療大学 NEWS&INFORMATION ■藝游會

■SD・FD 活動の取り組み ■キャリア支援活動

茨城県立医療大学の国際交流の現場から

高雄医学大学との国際連携教育協定締結



王秀紅高雄医学大学副学長(左) 永田博司本学学長(右)

去る6月12日に本学で行われた高雄医学大学(台湾)との国際連携教育協定締結式は、本学の国際的な発展における記念すべき一日となりました。

当日は300人を超える教職員や学生が参加しました。締結式には、高雄医学大学から王秀紅副学長、黄友利健康科学院長、王瑞霞看護学院長、黄玉華国際事務所員をお迎えし、本学からは永田博司学長をはじめ、水上昌文副学長、岩崎信明付属病院長、および各学科長・センター長が出席しました。これに先立ち、「国際化における高雄医学大学の方略…過去から未来へ」というテーマで王副学長による記念講演が行われました。高雄医学大学の国際交流活動についての概要、大学の歴史や組織、学術研究について紹介されました。締結式では報道各社の記者会見も行われ、この国際協定に対する関心の高さが伺われました。この協定締結について永田学長は「高齢社会という日本と台湾の共通の問題にともに取り組んでいくために、地域社会を支援するための国際的な展望を持つた医療者を育成することが期待される」と述べ、王副学長は、「出生率の低下と高齢化に直面する台湾本の高齢者施策から多くを学ぶことが出来る」と述べました。この協定締結は、本学の国際交流の未来を大きく切り開くものになると期待されます。



王副学長による海外招聘特別講演会

ます。

これまでに本学では、海外招聘講演会の開催や教員のための海外派遣研修支援など、様々な国際交流の取り組みが行われてきました。海外招聘講演会では毎回世界で活躍する医学医療分野の教員や研究者を招聘しており、本学教員および学生が国際的な視野をもって医療を学び考える貴重な機会となっています。最近では学生を対象にした国際交流セミナーやサイエンスカフェも行われ、取り組みの幅も広がっています。海外派遣研修は、本学教員による海外の大学や病院での短期研修を助成する制度であり、海外における医療や教育プログラムについて学び、国際感覚をもった教育研究を進展させるための良い機会となっています。学生の国際交流については、2013年のカリキュラム改定において「国際多職種協働実習」が新設



調印式での記念写真

されました。この科目は海外の高度医療環境における多職種連携の実際を見学するものです。これまでにロサンゼルスや台湾の病院や医療施設などを見学しています。

現在には年に数回の開催や短期間の活動に限定されていることもあり、普段の仕事や生活に戻れば単なる記憶のひとつになってしまうかもしれない。しかしながら、国際交流というものは地道に継続することによって、他の国の人々との結びつきが深まり、得られる成果がより大きなもの

のとなっていくと思われれます。本学にとって今回の協定締結は、国際交流の継続性を確保するための最良の方法のひとつになると期待されます。

高雄医学大学との交流の始まりは6年前に遡ります。2013年に本学作業療法学科の教員が高雄医学大学を訪問し、高雄医学大学側から本学との交流の継続について提案がありました。翌年には高雄医学大学の周映君教授を本学に招いてご講演いただきました。そして、両大学の作業療法学科で5年間の交流協定を締結し、短期留学の学生をお互いに入れられました。年を追うごとに学生の受け入れの数は増え、理学療法学科や放射線技術科学科でも短期留学が行われるようになりました。今回締結した協定によって、看護学科も交流の輪に加わることとなり、



高雄医学大学との国際交流

全学的に益々の発展が期待されます。さらに、教育および研究活動における教員間の国際交流も盛んに行われることが期待されます。

過去5年間の交流によって、両大学は強い信頼関係を構築してきました。特に学生たちはこの中で重要な役割を担ってきました。短期留学を経験したある学生は「国が違っても専門知識は同じだった」と振り返ります。まさに専門知識は国際的に共通したものであり、これらを通じて同じ職種を志す他国の学生と出会い、友情を深めることは、国際交流の重要性や医療人としての自覚をより確かなものになります。

高雄医学大学との国際連携教育協



高雄医学大学の概要

所在地：高雄市（台湾南部最大の都市）

歴史：1954年に「高雄医学院」として開校。

現在は7学部21学科、学生数 約7,300人の規模を誇る台湾で最も歴史がある私立医学院。1957年「高雄医学大学附属中和記念病院」を設置。高雄市は「高雄市立小港病院」（1998）・「高雄市立大同病院」（2009）・「高雄市立旗津病院」（2014）を高雄医学大学に経営委託。高雄医学大学は台湾南部の医療システムと教育の中核を担う。

定の締結は、深い信頼関係と国際的な医療の発展に向けた共通の目的をもつことによって達成されたことに疑いはありません。

本学と高雄医学大学との国際教育連携協定は、まさに現代の医療が抱える困難に立ち向かうのに相応しい、新たな目的と力強さをもった国際交流であるといえるのではないのでしょうか。

国際交流委員会 委員長

人間科学センター N. D. Party

（訳：同センター 福井 龍太）



看護学科

第11期卒業生

大澤 侑一

OSAWA Yuichi

——学生時代は？

今振り返ると学生時代の講義では、看護の心を教わったと感じます。病院に就職してからはあまり使わないシーツ交換の技術も、シーツをピンと張り、皺一つないように、出来上がりの美しさを求めるだけでなく、褥瘡にならないように、心地よい生活を送れるように、といった看護の感性や視点をお教えたのだと思います。不器用だった私はシーツ交換が苦手で、野々村典子先生は「不器用ね！こーよ！」と私の手をマットレスの下に入れ、先生がシーツを整えるとスルスルと皺が伸び、ピタリとマットレスに張り付いていくような光景と手の感覚がありました。その光景は今でも鮮明に覚えています。

講義以外の時間にもたくさんさんの経験をしました。特によさこいソーランは、元々は当時地域看護学の教授をされていた錦織正子先生の「大学前の通りで催されるまいあみ祭りに学生が関わってないのはいかが？参加してきて。」という一言から始まりました。参加メンバーは全員素人であり、まず何をしたら良いかも

分りませんでした。町役場に踊りのチームを紹介していただき、踊り方から音楽、衣装、道具、参加できる祭まで教わって、年に1度の全国大会へ2回参加するまでになりました。私たちが立ち上げたサークルが今も精力的に活動されているのを見聞きし、大変嬉しく思います。当時、



「認知症看護や老年看護の知識と経験を活かし、在宅分野や地域に貢献したい」

堀内ふき先生、錦織正子先生、川野道宏先生を半ば強引にお誘いし、まいあみ祭りや創療祭でよさこいソーランを踊ったことは大変懐かしい思い出です。今では恐れ多くともできませんが、これも医療大ならではの思い出だと思います。

——大学卒業後のキャリアは？

医療大学卒業後は公益財団法人 筑波メディカルセンターへ就職し、7年間勤務しました。働く中でせん妄や認知症看護に興味を持ち、ケアの力で変化することとやりがいを感じました。学問として認知症、高齢者をもう一度学び直したいと考え、病院を退職し千葉大学大学院看護学研究科老人看護学研究領域へ入学しました。在学中は講義と課題、研究活動で苦しい思いをしましたが、その分、臨床で働きながらでは味わえなかった、学問へ没頭できる楽しさを知りました。特に修士論文のデータ分析では、収集したバラバラのデータ片の分析が進むにしたがって意味を持ち始め、最終的には予想しなかった、でも納得できる形に集まっていたいくことに面白さを感じました。本当に苦しい時間で家族にも多大な迷惑をかけましたが、修了したときの喜びは一層大きかったです。

——現在の取り組みは？

2018年に大学院を修了し、再び筑波メディカルセンター病院へ就職しました。現在は、内科一般病棟に所属しながら、認知症ケアチームとして院内病棟を回っています。また老人看護専門看護師としてケアの実践を行ったり、スタッフからの相談を受けたりする中で自身の実践能力を高めることを意識しています。所属する病棟では、急性期病院入院中でもあっても患者がその人らしい生活を続けながら、認知機能やADLの維持向上を図ることを目標に、病棟内のグループ活動の一つとして院内デイケア活動を試み

ています。院内デイケアは病棟スタッフ

えています。

——今後取り組んでいきたいことは？

トリハビリススタッフが協働し、童謡を歌ったり、連想ゲームや風船バレーをしたりなど集団でのレクリエーション、季節に合った飾りを作る活動を行っていきます。この活動を通じてスタッフが、患者の意外な一面を発見したり、残された能力の大きさに気づいたりすることがあり、人生を歩んできた一人の人間として患者を捉え入院中のケアに活かそうとする意識が高まっていると感じています。院内デイケア活動の効果は今のところ客観的なデータとして出せていないので、今後は研究として成果を示していきたいと考えています。



PROFILE / Reason for Choice

1987年生まれ。茨城県出身。

2018年 千葉大学大学院看護学研究科 先端実践看護学講座 高齢社会実践看護学教育研究分野 老人看護学領域 博士前期課程修了

老人看護専門看護師 認定

現在 公益財団法人 筑波メディカルセンター病院 4A病棟（総合診療科、循環器内科）所属 認知症ケアチーム所属（専任看護師・横断）

高校生の頃、祖父に進行がんが見つかり、根治は無理と医師から告げられ、手術は受けられなかった。入院中に脳梗塞を発症し、夜間せん妄になった時期に身体拘束をしたくない、と母や祖母と交替で付き添ったことがあった。真夜中でも献身的に看護してくれる看護師の存在を知り、治らない病気はあっても看護できない人はいないと知った。

高校担任の先生に看護師になりたい、と話したところ、大学に進学して看護を学問として学びなさい、と勧められたのがきっかけで大学へ進学することを決めた。男性なのに看護師という点に不安があったが、医療大のオープンキャンパスで出会った男性の先輩方が気さくで、先生方との距離が近いことが魅力と勧められ、医療大学に入学した。



茨城県立医療大学大学院
保健医療科学研究科
理学療法学・作業療法学専攻2年次
(第15期卒業生)

木口 尚人さん

KIGUCHI Naoto

—— 本学の大学院に入ろうと思った理由は？

大学4年生の頃、授業で、その人にとって意味のある活動（＝作業）を用いたりハビリテーションが心身機能を回復させ、医療費の削減に効果があることを学びました。

その後、茨城県立医療大学付属病院に入職し、医療大の先生方のご指導の下で難病患者さんの就労支援や自動車運転支援、家事や余暇の支援など、様々な活動を用いた社会復帰の支援を行いました。また、作業療法士仲間と共に、病院を退院した患者さんや地域のハンデのある方たちと水族館に行ったり、料理教室を開催したりするなど患者さんがやりたい活動に挑戦できるきっかけを作るボランティア活動を行っていました。

今年度から、目白大学作業療法学科で、身体障害作業療法評価学や作業分析学などの授業を担当し、臨床や大学院で得た知識や経験をいながら、作業療法の魅力を学生に伝えられるよう日々奮闘しています。

—— 大学院に入学してよかったことや大変なことは？

面白いです。大学院の授業は学部の授業とは異なり、各教員の研究領域に関する知見を深く知ることもできました。中には、海外の作業療法士や他大学の教員による講義や演習、ディスカッションができる授業もあり、学部や普段の臨床では経験できない体験や、学びがたくさんあります。授業、研究、仕事の両立は少し大変ですが、他の院生と協力し合いながら乗り越えています。

—— 現在の大学院ではどのようなことを研究していますか？

作業療法士の臨床スキルに関する研究をしています。食事をする、入浴をするなどの身のまわりの作業や家事や犬の散歩をする、ATMを使用するなどのより広範囲におよぶ作業を支援する際、実際に患者さんが作業をしている場面の観察評価に基づいての介入は高い効果があることが報告されているのですが、臨床現場では、作業を用いた評価・治療には様々な障壁があり実践しにくい状況にあり、専門性が十分に発揮できていないことが指摘されています。そこで、それらの障壁を軽減するために作業療法

士はどのような知識や技術を身に付け、どのような教育の場が必要であるのか、既存の講習会を用いて研究しています。

—— 今後の木口さんのキャリアや夢は？

作業療法の良さをもっと社会に発信したいです。今年、イギリスは、医療費削減や生活の質を高めるために、料理活動やアート教室に参加するなどといった作業への参加を介した医療政策を打ち出したそうです。国内でも地域包括ケアが推奨されている中、生活機能への支援が強く求められるなど、作業を用いて健康を支援する作業療法士の活躍が期待されています。必要な知識や技術を研鑽できる新たな教育の場を開発・発展させ、これからの社会のニーズに応えることができる療法士の育成に関わっていきたくと考えています。



PROFILE

1990年生まれ。茨城県出身。卒業後、柳原リハビリテーション病院、関ヶ原病院、茨城県立医療大学付属病院にて作業療法士として活躍。現在は目白大学保健医療学部作業療法学科助教。

—— 木口さんの大学卒業後のキャリアは？

卒業後は、東京都の病院で回復期病棟に勤務した後、岐阜県の病院で小児領域や介護予防事業に従事しま

付属病院を紹介します

看護部



リハビリテーション専門病院の日々の看護は、日常生活の援助が中心です。ベッド上ではなく食堂で食事する、入浴は浴槽に週2回以上入る、オムツは極力使用しない、朝夕に更衣する、毎食後に口腔ケアをする等、回復リハ棟ケア…10項目宣言に準じた看護を提供しています。

私は、障害のある患者さんや家族が、「毎日の生活と続いていく人生を、いかに意味のあるものでできるか、そのために、看護ができることは何か。」ということを考えながら、看護をしています。

看護師
秋元 陽子
(第2期卒業生)

医療技術部 放射線技術科



放射線技術科ではX線撮影・CT・MRI・核医学などの画像検査業務を行っております。私たちは医療機器の性能を十分発揮し、できる限り患者さんへ負担をかけずに診断に有用な画像をご提供できるよう努めております。また安心・安全な医療をご提供するために、最新の医療技術を導入し医療被ばく低減を目指した検査を行っております。卒業生の皆さんもこの美しい地球の青空の下、ともに高い志を持って診療放射線技師として頑張ってください。

診療放射線技師
谷田部 克彦

リハビリテーション部 理学療法科



理学療法科はスタッフ33名です。日常生活やそれらに関連した動作の獲得を目指して、看護師・リハビリテーションスタッフとともに療法室での練習や病棟での練習、外出先での練習を交えて取り組んでおります。また、週に1度、ブレースクリニクにて医師、義肢装具士と一緒に下肢や体幹の装具の評価・作製を行っております。

当院は回復期、小児、障害者病棟と3つの異なる特性をもった病棟があり、様々な障害や病期の患者様に対してリハビリテーションを実施しております。

理学療法士
佐野 岳
(第4期卒業生)

リハビリテーション部 作業療法科



作業療法科の近況について、ご紹介いたします。1つ目は、スタッフの拡充に伴い2018年9月時点で、スタッフ数が総勢29名(うち研修士3名)になりました。2つ目は新型ドライビングシミュレータ導入に伴い、作業療法室の模様替えを行いました。3つ目は今年度から作業療法実践の質の向上を目的としたプロジェクトとして、運転評価、シーティング、ニューロリハビリテーション、音楽療法、作業を中心とした作業療法の実践をキーワードに、臨床・研究班を立ち上げ活動を開始しました。

作業療法士
渡邊 信也
(第6期卒業生)

研修士(リハビリテーション部)

現在、私は様々な疾患を持つ患者様の見学・療法の経験を積んでおります。また、研修士制度を活用し自閉症児の運動特性をテーマに研究を進めております。臨床と研究の両立ができ、さらに自分の視野も広がることができるよう充実した日々が送れていることを実感しています。

研修士 理学療法士
西川 絢子

研修士制度とは・・・付属病院で働きながら、多分野に渡るリハビリテーションの知識と高度な臨床技術を習得できる制度です。勤務時間が正職員より短いため、空いた時間を研究や大学院への通学に充てることもできます。



平成30年度茨城県立医療大学に新しく着任・昇任した教員



齋藤 佑見子
看護学科
助教
4月1日新任
小児看護学



中村 摩紀
看護学科
准教授
4月1日昇任
老年看護学



本村 美和
看護学科
准教授
4月1日昇任
成人看護学



鶴見 三代子
看護学科
講師
4月1日昇任
在宅看護学



竹永 智美
放射線技術科学科
助教
9月1日新任
医用画像情報



中島 登志子
看護学科
助教
10月1日新任
地域看護学



佐々木 剛
作業療法学科
助教
11月1日新任
精神障害作業療法学

平成30年度茨城県立医療大学の定年退職教員

市村 久美子 (看護学科 教授 成人看護学)



本学開学に向けて看護学科の先生方による大学創設の準備をする会、通称「阿見の会」に参加させていただいて早25年余りが経ちます。大学開設、付属病院開院、大学院開設、認定看護師教育課程の開設等、何かしらの創設準備の一端に関わらせていただき、本当に変化に飛んだ日々でした。ひたすら前を向いてきた感があり、気がついたら定年です。部屋も片付けなければならない今、やっと過去を振り返る機会になっており、開学当初の書類を目にすると、この頃は何もわかっていなかった自分に気づき、改めて周りの方々に育てられて、今日に至っていることを痛感しています。

学生に恵まれ、教職員に恵まれ、本当に楽しく充実した教員生活でした。

茨城県立医療大学への愛着は変わりませんが、一步外から大学の発展を祈っています。

武島 玲子 (医科学センター 教授 麻酔科学)



本学へ赴任したのは平成8年4月でしたので23年間、一番長い勤務先となりました。思い出は数多くありますが、やはりスキルラボ「あいらほ」を開設したことです。故工藤典雄学長にシミュレーション教育とスキルラボの重要性を提言し、ご支援のもとに実現することができました。時には「あいらほ」を利用して看護学科卒業生と一緒に研究をし、「あいらほ」の発展に卒業生からも協力していただきました。現在も卒業生から若いエネルギーとその能力の高さに私の方が刺激を受けております。どうぞ医療大学で学んだご自分を信じて進んでください。そして今後も、「あいらほ」を利用していただきたくお願いいたします。皆さまと医療大学の今後の発展を心から祈念いたしております。

長い間、本当にありがとうございました。

松田 たみ子 (看護学科 教授 基礎看護学)



着任前の面接は永田博司先生が進行して下さったこと、平成21年10月の着任までに、大学院後期(博士)課程申請に関連して、前任地まで森浩一先生にご足労いただいたことは今も記憶に鮮やかです。着任後は、私の力に余る役割も与えていただき、充実した日々でした。また私は、本学の開設の準備が始まった頃に岩崎洋治先生からお声をかけていただきながら、当時は異動可能な状況になく失礼をいたしました。そのような経緯の下、教員最後の期間を茨城県立医療大学に席をいただきましたことに、深い縁を感じております。振り返れば足掛け10年、言葉で言い尽くせないほどお世話になりました。この期間ご一緒させていただいた全教職員の皆様に心より御礼申し上げます。

星出 てい子 (看護学科 助教 リハビリテーション看護学)



本学開校の時、勤務先の病院から看護学実習室の見学に訪れる機会がありました。この時看護教育の素晴らしい設備と環境に大変感動したのを覚えています。その後大学と付属病院は、魅力的な研修開催や、外来での嚥下造影検査の受け入れなど、地域で頼りになる場所でした。摂食嚥下障害看護分野の認定看護師教育課程が開講し、受講と卒後には教員への道というチャンスをいただきました。この10年は、自身の未熟さに直面しながら学び続ける日々でした。そんな私が続けられたのは、どんな時にも暖かく見守り、身をもって教育的に関わるという事を教えてくださった教職員の皆様のおかげです。定年という区切りをこの場所で迎えることを幸せに思います。本当にありがとうございました。

第11回日本保健医療福祉連携教育学会学術集会を本学にて開催しました。

平成30年8月11日、第11回日本保健医療福祉連携教育学会学術集会が本学で開催されました。

当日は、400人近い方々にご参加いただき、「地域包括ケア時代における連携教育と多職種協働実践～深める、広げる、役立てる多職種連携～」というテーマのもと、近年、医療・福祉・保健活動の現場で重要性が高まっている多職種連携に関する講演会やシンポジウム、ワークショップ、口述発表・ポスター発表など、様々なプログラムが行われました。また、当日は特別企画として、ロボットスーツHAL®の展示・体験会や障がい者スポーツ（車いすバスケットボール）のデモ・ミニ体験会なども同時に開催されました。

本学術集会は、医療・福祉・保健それぞれの現場における多職種協働の実践方法や、本学を含む教育現場における多職種連携教育の在り方について学ぶ貴重な機会になったものと思います。



地域貢献公開講座

夏休み親子科学教室

～小学生だけでなく保護者にも大人気！大人も楽しい親子科学教室～

小学4年生から6年生の子供とその保護者を対象に毎年夏休み親子科学教室（2教室）を開催しています。毎年定員を超える多数の申込み（平成30年度は2講座計188組の応募）があり、今年度は8月4日（土）に行い、それぞれ20組が参加しました。

① 「ペットボトル顕微鏡を作ってみよう」

人間科学センター 教授 大西 健

ペットボトルと小さいビー玉で顕微鏡を作りました。親子共同で手作りし、作成後は、教室に用意してあったタマネギの細胞やオオカナダモを観察しました。



② 「見えないものをみる～体の中を探る仕組み～」

放射線技術科学科 教授 中島 光太郎

実際の病院で使われている放射線画像診断装置や超音波装置を使って血管などや臓器などの体の中の様子や身近なものの中の様子を観察し、超音波診断装置で食べ物や金魚の写真を撮影しました。



けあ・きゅあ体験講座

～福祉・介護関係者の方のみならず、一般の方にもわかりやすい内容となっています～

介護をする人、受ける人の「食事」「移動」「介護者の支援」などをテーマに体験型の講習会「けあ・きゅあ体験講座」を毎年実施しております。今年度は9月から10月の土曜日または日曜日に4回行い、延べ72名の方が参加しました。

第1回 9月15日（土）「日常生活動作の介助方法と工夫」

作業療法学科 助教 高崎 友香

第2回 9月29日（土）「脳卒中を予防しよう！予防のための10か条」

附属病院看護師 立原 美智子

第3回 10月6日（土）「理学療法の理解と体験」

理学療法学科 准教授 岩本 浩二

第4回 10月14日（日）「大切なお薬との『つきあい方』」

医科学センター 教授 山口 直人



茨城県立医療大学同窓会

藝游會

Alumni Association

学生食堂の外に立つ梅のつぼみもほころぶ季節となりました。同窓生の皆様におかれましては、日々ご活躍のこととお慶び申し上げます。

今年度からの新たな取り組みの一つとして、昨年度のIPU通信でお知らせしたとおり、定期総会を6月に開催することとなりました。去る平成30年6月23日(土)に、15名の参加を得て総会を開催いたしましたので、議事録より概要を抜粋してご報告いたします(議事録は大学ホームページの同窓会のページに掲載しておりますので、合わせてご覧ください)。

平成30年度 同窓会セミナーのご案内

今年度の同窓会セミナーは、平成31年2月24日(日)に筑波大学医学医療系整形外科の久保田茂希先生(作業療法士)をお迎えして、ロボットを使った運動器疾患に対するリハビリテーションの最先端について講演をいただきます。是非皆様万障お繰り合わせの上、ご参加ください。

講師名 久保田 茂希 先生

御所属 筑波大学 医学医療系

整形外科セミナー

日時 2019年2月24日(日)

13:00~14:30

セミナー会場 多目的実習室2

テーマ 運動器疾患におけるロボット

トリハビリテーション

作業療法士の視点から

在学生支援事業として

国家試験対策関連図書

図書館に寄贈いたしました!

既に昨年度の総会にてご承認をいただきました在学生支援事業の一環としての国家試験関連図書の寄贈が、本年度より始まりました。

国家試験対策に関する参考書は毎年更新され、その購入にかかる金額は消して小さいものではありません。在学生の皆さんには、是非、寄贈された図書をご活用いただき、4年間の集大成としてしっかりと勉学に励んでいただけることと期待しております。

また、在学生支援事業につきましてご理解をいただきました同窓生の皆様にも、教員の立場からこの場をお借りして御礼を申し上げます。地域社会で活躍できる優秀な人材を育成していくために、これからも同窓会のご支援をよろしくお願い申し上げます。

卒業生支援事業として

スマートフォンで利用できる

「藝游會アプリ」を開発中!

昨年度より新規事業としてご提案をさせていただいております。同窓会専用アプリの開発につきましては、今年度の総会にてご審議を賜りご承認をいただきました。平成31年3月の第21期卒業生の卒業に合わせて本格運用を目指し、ただいま開発を進めております。

このアプリは、卒業時にID(学籍番号)と初期パスワードを発行して、卒業生の皆様の携帯端末にアプリをダウンロードしていただき、ご活用いただくものです。主な機能は2つあり、一つは大学から同窓生の皆様に向けてのご案内(各種イベントや講演会・研修会、人事の異動のお知らせなど)をお届けする機能、もう一つは学科や卒業期を絞って連絡できる機能です。例えばお世話になった先生の退官記念パーティや学会等でのクラス同窓会を開くお知らせや、本学卒業生を対象とした就活に役立つ情報などを、複数の学科や学年に渡ってお知らせすることができる機能の搭載を検討しています。

大学から同窓生の皆様への情報発信の場、同窓生同士の交流の場として活用していただける楽しいアプリになるよう、引き続き努力してまいります。

同窓会「藝游會」へのお問い合わせ、ご意見などございましたら、お気軽にお寄せ下さい。

連絡先

会長 橘 香織

(PT二期卒業生・茨城県立医療大学理学療法学科准教授)

✉ tachibana@ipu.ac.jp

本学では、教員と職員が協働し、教育・研究・臨床のさらなる質向上に向けて、その能力開発に力を入れて取り組んでいます。平成30年度は、次のようなプログラムを実施しました。

- 新任教職員ガイダンス（4月2日）
- 公立大学協会主催「大学改革支援研究会」及び「公立大学に関する基礎研修」への参加（5月14日）
- FDネットワーク“つばさ”協議会への参加（5月26日）
- 第13回公開授業「小児看護学」（7月4日）
- 第39回IPUミーティング「公的研究費コンプライアンス研修会」（9月26日）
- 学長と大学院生との懇談会（9月26日）
- 第31回全学SD・FD研修会「大学改革と授業改革」及び「地域における多職種連携教育と大学の役割 ～ごちゃまぜ、置き去り、むちゃぶり～」の2講演会（10月22日）
- 第14回公開授業「人体の機能実習」（10月18日）
- 学長と学部生による教育に関する懇談会（11月22日）
- 第40回IPUHSミーティング「内部質保証の観点からのIR」（12月18日）
- 第41回IPUHSミーティング「多職種連携の現状について、現場の声を聞いてみよう！」（平成31年3月予定）



※「SD」とは、本学及び付属病院の教職員が、大学や病院の運営に必要な知識及び技能を習得し、並びにその能力・資質を向上させるための取り組み（スタッフ・ディベロップメント）をいう。また、「FD」とは、本学が実施する教育の内容及び方法の改善を図るための組織的な取り組み（ファカルティ・ディベロップメント）をいう。

* キャリア支援活動 *

～キャリア支援センターでは在校生・卒業生のキャリア支援を行っています～

★就活プチ講座

4年生の実習が7月末に終了すると、就職活動が本格的に始まります。キャリア支援センターには多くの4年生が来室し、相談員は個別に相談や履歴書添削、面接対策等の支援を行います。毎年8月上旬に行われる就活プチ講座では、就職試験を目前にした4年生向けに実践的な内容で履歴書作成講座・筆記試験・小論文対策講座・面接講座を開催しています。今年のはべ174名の参加がありました。



○面接講座

★病院見学バスツアー

毎年全学科全学年の学生対象に県内病院を見学するバスツアーを年3回行っています。今年度は、8月末と9月に県央・県南の病院を訪問しました。県内の病院について知る有意義な機会となりました。春休みの2月には、今年度最終回として県西地区の3病院を見学する予定となっています。

- 県央地区病院見学バスツアー（平成30年8月31日（金）26名参加）
県立こども病院、水戸医療センター、県立こころの医療センター
- 県央・県南地区病院見学バスツアー（平成30年9月12日（水）27名参加）
県立中央病院、いちほら病院、筑波メディカルセンター病院



○国立病院機構水戸医療センター

★卒業生の方も応援しています！

キャリア支援センターでは、卒業後の就職支援も行っております。ご自身の強み、潜在的なキャリアのニーズを考えるなど自己理解を深め、主体的に仕事を選択できるようにサポートいたします。また、大学には医療機関から求人者が数多く届いています。卒業生も求人票をご覧くださいことができます。自身が希望するキャリアの道筋を実現するために、是非一度キャリア支援センターにご相談ください。

茨城県立医療大学キャリア支援センター相談員一同（TEL：029-840-2109）

茨城県立医療大学は茨城大学COC+の参加校です



文部科学省の補助事業「地(知)の拠点大学による地方創生推進事業(COC+)」に、茨城大学を代表校とする4大学1高専(茨城大学、茨城キリスト教大学、常磐大学、茨城工業高等専門学校、本学)が協働で申請した「茨城と向き合い茨城に根ざし、未来を育む地域協創人材養成事業」が採択され、平成27年度から始動しました。

茨城と向き合い茨城に根ざし、未来を育む地域協創人材養成事業

卒業生の茨城県内の就職と地元定着率の向上を目標に掲げ、4大学1高専が地域志向科目「茨城学」を共有するとともに、地域理解力、地域の課題発見・解決能力、実践に即したプロジェクト企画能力を備えた地域協創人材を養成します。さらには、地域の安全・安心な生活環境の向上や地域の活性化を図る取組を行います。

《地域協創人材教育プログラム始動》

4大学1高専が共有する地域志向科目「茨城学」が29年度から開講しました。地域協創人材教育プログラムは、「茨城学」をはじめ、大学が指定する「地域志向科目」及び「就業支援科目」、「インターンシップ科目」で構成されています。地域協創人材教育プログラムで指定する科目を履修した方に、認定証を交付します。

本学の略称について

茨城県立医療大学(Ibaraki Prefectural University of Health Sciences)の新しい略称が決定しました。「IPUHS」(アイピーユーエイチエス)となります。本学も創立20年を過ぎ、新たなステージに入りました。今後は「IPUHS」として、さらなる発展を目指します。

学生広報支援グループの設置について

本年度、学生が大学に協力して広報活動を行う学生広報支援グループを設置しました。学生広報支援グループは、広報ワーキンググループが認定した学生広報支援委員(Student Publicity Assistant)によって構成されます。表紙、裏表紙、藝遊會(10ページ)の写真は、学生広報支援委員の三谷優奈さん(作業療法学科22期生)が学内で3~5月に撮影したものです。

卒業生の方へ

卒業生との交流会等の企画・開催、大学情報を発信するため、勤務先や住所に変更があった時は、必ず電話又は書面もしくは本学ホームページに掲載している「卒業生連絡先等調査」入力フォーム(<http://www.ipu.ac.jp/article/14214743.html>)により、お知らせください。

表紙について

表紙の彫刻は、本学開学時に、風景彫刻で名高い山本正道氏によって作成された『樹と少女'95』という作品です。附属図書館の横に置かれています。

茨城県立医療大学 IPUHS通信 vol.006

発行月：平成31年2月

発行：茨城県立医療大学

問合せ先：茨城県立医療大学

〒300-0394

茨城県阿見町阿見4669番地の2

Tel：029-888-4000

Fax：029-840-2301

<http://www.ipu.ac.jp>

